

Ⅱ・白文に挑戦（その2）

1 『列子』湯問編

孔子東遊。見兩小兒弁鬪、問其故。一兒曰「我以、日始出時、去人近、而日中時遠也。」一兒以、「日初出遠、而日中時近也。」一兒曰、「日初出、大如車蓋。及日中、則如盤盂。此不為遠者小而近者大乎。」一兒曰「日初出、蒼蒼涼涼。及其日中、如探湯。此不為近者熱而遠者涼乎。」孔子不能決。兩小兒笑曰、「孰為汝多知乎。」

○列子＝中国戦国時代の道家の思想家。○遊＝旅行。○弁鬪＝口論。○以えらく（以為）＝とみなす。と考える。●去人近←日と人との距離が近いの意味。○車蓋＝馬車に立てる傘。○盤盂＝食器の鉢や椀。○蒼蒼涼涼＝冷え冷えとしたさま。

孔子東遊す、兩小兒の弁鬪するを見て、其の故を問ふ。「一兒曰はく、「我以へらく、日の始めて出づる時、人を去ること近くして、日の中する時は遠」と。「一兒以へらく、「日初めて出づるや遠くして、日の中する時近」と。「日の初めて出づるや、大いなること車蓋のごとし。日の中するに及びては、則ち盤盂のごとし。此れ遠き者小にして近き者大なるがため為らざるや」と。「一兒曰はく、「日の初めて出づるや、蒼蒼涼涼たり。其の日の中するに及びては、湯を探るがごとし。此れ近き者は熱くして遠き者は涼しきが為ならずや」と。孔子決すること能はず。兩小兒笑いて曰はく、「孰か汝を知多しと為せるや」と。

2 『韓非子』

晏子聘魯。哀公問曰「語曰、莫三人而迷」。今寡人与一國慮之、魯不免於乱何也。」晏子曰、「古之所謂莫三人而迷者、一人失之、二人得之。三人足以為衆矣。故曰、莫三人而迷。今魯國之群臣以千百數、一言於季氏之私。人数非不衆、所言者一人也。安得三哉。」

○晏子＝晏嬰。春秋時代の斉の政治家で名宰相。○聘＝訪問する。○哀公＝魯の君主。○寡人＝王侯の謙称。○一國＝国中の人。○衆い＝おおい。○一言＝言葉を合わせる。○季氏＝魯の公族・季孫氏。○一言する＝言葉を合わせるの意。○私＝私欲。

晏子魯を聘ふ。哀公問いて曰はく「語に曰ふ、三人にして迷ふ莫し」と。今寡人一國と之を慮れども、魯乱を免れざるは何ぞや」と。晏子曰はく、「古の所謂三人にして迷う莫しとは、一人これを失すとも、二人之を得るなり。三人ならば以て衆しと為すに足る。故に曰はく、三人にして迷ふなしと。今魯國の群臣千百を以て數ふるも、季氏の私に一言す。人数衆からざるに非ざれども、言ふ所の者一人のみ。安ぞ三たるを得んや」と。

3 『搜神記』

晋武帝世、河間群有男女私悦、許相配適。尋而男從軍、積年不歸。女家更欲適之、女不願行。父母逼之、不得已而去、尋病死。其男戍還、問女所在。其家具說之。乃至冢、欲哭叙哀而不勝其情、遂發冢開棺。女即蘇活。因負還家、將養數日、平復如初。後夫聞、乃往求之。其人不還曰、「卿婦已死。天下豈聞死人可復活耶。此天賜我。非卿婦也。」於是相訟。郡県不能決、以讞廷尉。秘書郎王導奏、「以精誠之至感於天地、故死而更生。此非常事。不得以常礼断之。請還開冢者。」朝廷從其議。

○晋武帝＝西晋の初代皇帝・司馬炎。○河間群＝地名。○私悦＝密かに愛し合う。○配適＝結婚する。○尋いで＝まもなく。○更めて＝あらためて。○適ぐ＝嫁にいく。○成る＝守る。○具そこに＝詳しく。○冢＝墓。○敘べる＝ありのままに述べる。○発く＝暴く。○負う＝背負う。○將養＝食べ物を与え保護する。○郡県＝群や県の役所。○廷尉＝裁判・刑罰を司る官名。○讞ぐ＝申し上げる。○秘書郎＝宮中の書物・文書を司る官名。○王導＝人名。○精誠＝純粹な誠実さ。

晋の武帝の世に、河間群に男女の私悦し、相ひ配適するを許すもの有り。尋いで男軍に從ひ、積年歸らず。女の家更めて之を適がしめんと欲するも、女行くを願はず。父母之に逼れば、已を得ずして去り、尋いで病みて死す。其の男戍より還り、女の在る所を問ふ。其の家具に之を説く。乃ち冢に至りて、哭して哀しみを敘べんと欲するも其の情に勝てず、遂に冢を發き棺を開く。女即ち蘇活す。因りて負ひて家に還り、將養すること數日、平復して初めのごとし。後に夫聞き、乃ち往きて之を求む。其の人還さずして曰はく、「卿

の婦は已に死せり。天下豈に死人の復た活くべきを聞かんや。此れ天我に賜ふなり。卿の婦に非ざるなり」と。是に於て相ひ訟ふ。郡県決する能はず、以て廷尉に讞ぐ。秘書郎王導奏すらく、「精誠の至の天地を感ぜしむるを以てなり、故に死して更めて生く。此れ非常の事なり。常礼を以て之を断ずるを得ず。請ふ冢を開くる者に還せ」と。朝廷其の議に従ふ。

4 『後漢書』列女 周郁妻伝

沛群周郁妻者、同群趙孝之女也。字阿。少習儀訓、閑於婦道。而郁驕淫輕躁、多行無礼。郁父偉謂阿曰、「新婦賢者女、当以道匡夫。郁之不改、新婦過也。」阿拜而受命、退謂左右曰、「我無樊衛二姬之行。故君以責我。我言而不用、君必謂我不奉教令、則罪在我矣。若言而見用、是為子違父而從婦、則罪在彼矣。生如此、亦何聊哉。」乃自殺。莫不傷之。

○後漢書＝後漢時代の事績を記した書。○沛群＝中国にかつて存在した郡。○少い＝若い。○儀訓＝正しい教え。○閑う＝習熟する。○驕淫輕躁＝心驕り淫らで軽はずみなこと。○匡す＝正しくする。是正。○樊衛二姬＝樊姫と衛姫。共に夫を諫めて行いを改めさせた賢夫人。○教令＝戒め諭すこと。○聊せんや＝安んぜんや。安心していられようか。○傷む＝悲しむ。憐れむ。

沛群の周郁の妻は、同群趙孝の女なり。字は阿。少くして儀訓を習ひ婦道に閑ふ。而るに郁は驕淫輕躁、多く無礼を行ふ。郁の父偉阿に謂ひて曰はく、「新婦は賢者の女、当に道を以て夫を匡すべし。郁の改めざるは、新婦の過ちなり」と。阿拜して命を受け、退きて左右に謂はく、「我樊衛二姬の行ひ無し。故に君以て我を責む。我言ひて用ひられざれば、君必ず我教令を奉ぜずと謂わん、則ち罪我に在り。若し言ひて用いらるれば、是れ子父に違えて婦に従ふと為さん、則ち罪彼に在り。生きて此のごとくんば、亦た何ぞ聊せんや」と。乃ち自殺す。之を傷まざるは莫し。

5 『峇参』『巴南舟中』

渡口欲黄昏 婦人争渡喧
近鐘清野寺 遠火点江村
見雁思鄉信 聞猿積淚痕
孤舟万里秋 秋月不堪論

○峇参カサン＝盛唐の詩人。西域の節度使として辺境に滞在した体験から辺境風物の題材が多く、辺塞詩人と呼ばれる。○巴南パナン＝地名。○渡口クワウ＝川の渡し場。○喧カマヒ＝やかましい。●雁カ←故郷から手紙を運ぶものとしての象徴。○郷信カウシ＝故郷からの便り。●猿カ←猿の鳴き声は悲しさや寂しさの象徴として漢詩などで使われる。

渡口黄昏ならんと欲し 婦人渡を争つて喧し
近鐘野寺に清く 遠火江村に点す
雁を見て郷信を思ひ 猿を聞きて涙痕を積む
孤舟万里の秋 秋月論ずるに堪へず

6 『高斎漫録』・『風俗通義』

(一)昔蘇東坡問王安石。「坡字何解。」王曰、「坡者、土之皮也。」蘇笑曰、「然則滑者水之骨乎。」以安石如此聰明、尚不可妄解。何況不及安石者耶。
(二)齊人有女。二家同往求之。東家子醜而富、西家子好而貧。父母不能決。使其女偏袒示意。女便兩袒。母問其故。答曰、「欲東家食而西家宿。」

○蘇東坡ソウトウ＝蘇軾。○王安石アンシ＝北宋の政治家・思想家・詩人。唐宋八大家の一人。●好カウ＝美しいの意。○妄マダり＝でたらめ。○偏袒ヘンタン＝片肌を脱ぐこと。○兩袒リウタン＝もろはだ脱ぎ。

(一)昔蘇東坡王安石に問へり。「坡字は何と解するや」と。王曰はく、「坡とは、土の皮なり。蘇笑ひて曰はく、「然らば則ち滑とは水の骨か」と。安石の此のごとき聰明を以てすら、尚ほ好に解すべからず。何ぞ況んや安石に及ばざる者をや。」

(二) 齊人に女有り。二家同じく往きて之を求む。東家の子は醜くして富み、西家の子は好しくして貧し。父母決すること能わず。其の女をして偏袒して意を示さしむ。女便ち両袒せり。母其の故を問ふ。答へて曰はく、「東家に食して西家に宿せんと欲す。」

7 『晋書』

劉琨、少負士氣、有縱橫之才。善交勝己、而頗浮誇。与范陽祖逖為友。聞逖被用、与親故書曰、「吾枕戈待旦、志梟逆虜、常恐祖生先吾著鞭」。其意氣相期如此。在晋陽、嘗為胡騎所困數重、城中窘迫無計。琨乃乘月登樓清嘯。賊聞之、皆淒然長嘆。中夜奏胡笳、賊又流涕歔歔、有懷土之切。向曉復吹之、賊並棄圍而走。

○晋書＝古代中国の晋朝について書かれた歴史書で二十四史の一つ。○劉琨＝西晋時代から五胡十六国時代にかけての武将・政治家。○浮誇＝大言壮語する。○祖逖＝西晋から東晋にかけての名武将。○親故＝親戚・友人。○戈＝古代中国で使われた武器。○旦＝朝。夜明け。○逆虜＝逆賊。○梟＝首を切つてさらす。●先吾著鞭←自分より先に手柄を立てる。○胡騎＝異民族の兵士。○窘迫＝困窮する。○清嘯＝高い声でうそぶく。○淒然＝いたみ悲しむさま。○胡笳＝胡より伝わった笛。○歔歔＝むせび泣く。

劉琨、少くして士氣を負ひ、縱橫の才有り。善く己に勝るものと交はりて、頗る浮誇す。范陽の祖逖と友たり。逖の用ひらるるを聞かば、親故に書を与へて曰はく、「吾戈を枕にして旦を待ち、逆虜を梟せんと志し、常に祖生の吾に先んじて鞭を著つるを恐る」と。其の意氣相ひ期すること此のごとし。晋陽に在りしとき、嘗て胡騎の罍む所と為ること數重、城中窘迫して計無し。琨乃ち月に乗じて樓に登りて清嘯す。賊之を聞き、皆淒然として長嘆す。中夜胡笳を奏すれば、賊又涕を流して歔歔し、土を懷ふの切なること有り。曉に向ひて復た之を吹けば、賊並びに罍を棄てて走る。

8 『笑賛』

卜者子不習本業。父譴怒之。子曰、「此甚易耳」。次日有從風雨中求卜者。父命子試為之。子即問曰、汝東北方來乎。曰、「然」。曰、「汝姓張乎」。曰、「然」。復問、「汝為尊正卜乎」。亦曰、「然」。其人卜畢而去。父驚問曰、「爾何前知如此」。子答云、「今日乃東北風。其人面西來、肩背尽湿。是以知之。傘柄明刻清河群。非張姓而何。且風雨如是。不為妻、誰肯為父母出來」。

賛曰、卜者子甚是聰明、可惜不曾讀孟子。若讀了孟子時、便知人性皆善。豈有視父母反輕於妻之理。

○笑賛＝笑い話と批評文。明の趙南星著。○趙南星＝政争に巻き込まれ高位を追われて不遇のうちに過した。○卜者＝占い師。○譴怒＝咎め怒る。○従A＝Aから。○尊正＝他人の妻の尊称。○畢＝終わる。○前知＝あらかじめ知っていること。○清河群＝地名。

卜者の子本業を習はず。父これを譴怒す。子曰はく、「此れ甚だ易きのみ」と。次の日、風雨の中より卜を求めし者有り。父子に命じて試みに之を為さしむ。子即ち問ひて曰はく、汝東北の方より来たれるか。曰はく、「然り」と。曰はく、「汝の姓は張なるか」と。曰はく、「然り」と。復た問ふ、「汝尊正の為に卜するか」と。亦た曰はく、「然り」と。其の人ト畢はりて去る。父驚き問ひて曰はく、「爾何ぞ前知すること此のごとくなる」と。子答へて云ふ、「今日は乃ち東北の風なり。其の人西に面して来れば、肩背尽く湿れり。是を以て之を知れり。傘の柄に明らかに清河群と刻せり。張姓に非ずして何ぞや。且つ風雨是のごとし。妻の為ならずんば、誰か肯へて父母の為に出来たらんや」と。賛に曰はく、卜者の子甚だ是れ聰明なれども、惜しむべし曾て孟子を讀まざりしことを。若し孟子を讀み了りし時は、便ち人の性は皆善なるを知る。豈父母を視ること反つて妻より軽きの理有らんや」と。

9 『莊子』山木篇

莊子行於山中、見大木枝葉盛茂。伐木者止其旁、而不取也。問其故、曰、「無所可用。」莊子曰、「此木以不材得終其天年。」夫子出於山、舍故人家。故人

喜、命豎子殺雁而烹之。豎子謂曰、「其一能鳴、其一不能鳴。請奚殺。」主人曰、「殺不能鳴者。」明日弟子問於莊子曰、「昨日山中木以不材得終其天年。今主人之雁以不材死。先生將何処。」

○旁かたわら＝そば。○不材ふざい＝木として役に立たない。○舍やしす＝泊まる。○豎子じゅし＝召使の少年。○奚いずれ＝二つ以上あるものの中のどれか一つ。○処ところる＝居る。身を置く。

莊子山しやうしやん中ちゆうに行ゆきて、大木たいたくの枝葉しやうえつ盛さか茂もするを見る。木きを伐きる者もの其そのの旁かたわらり止とどまるも、取とらざるなり。其そのの故ゆゑを問とへば、曰いはく、「用もちふるべき所ところ無なし」と。莊子しやうし曰いはく、「此こゝの木き不材ふざいを以もつて其そのの天年てんねんを終おふるを得えたり」と。夫つま山やまより出いで、故こゝ人じんの家いへに舍しす。故こゝ人じん喜よろこび、豎子じゅしに命いのちじて雁かりを殺ころして之これを烹にじむ。豎子じゅし謂いて曰いはく、「其その一いつは能よく鳴なぎ、其その一いつは鳴なく能あたわず。請こみ奚いれを殺ころさん」と。主人しゆじん曰いはく、「能よく鳴なかざる者ものを殺ころせ」と。明日あした弟子でし莊子しやうしに問とひて曰いはく、「昨日けふ山やま中ちゆうの木きは不材ふざいを以もつて其そのの天年てんねんを終おふるを得えたり。今いま主人しゆじんの雁かりは不材ふざいを以もつて死しす。先生せんせい將まさに何いずれに処ところらんとす」と。

10 『世説新語』規箴篇

漢武帝乳母嘗於外犯事。帝欲申憲、乳母求救東方朔。朔曰、「此非脣舌所爭。爾必望濟者、將去時、但當屢顧帝。慎勿言。此或可万一冀耳。」乳母既至。朔亦侍側。因謂曰、「汝痴耳。帝豈復憶汝乳哺時恩邪。」帝雖才雄心忍、亦深有情恋。乃凄然愍之、即勅免罪。

○申まをべる＝告げる。○東方朔とうほうしやく＝前漢武帝の近臣。巧みな弁舌と文章を得意とする。○憲けん＝法、法律。○脣舌しんせつ＝口弁。○冀きう。○才雄さいゆう＝すぐれた才能。また、その持ち主。○凄然せいぜん＝悼み悲しむ。○愍あはれむ＝憐れむ。

漢の武帝の乳母嘗て外に於て事を犯す。帝憲を申べんと欲し、乳母救ひを東方朔に求む。朔曰はく、「此れ脣舌の争ふ所に非ず。爾必ず済はれんことを望まば、將に去らんとする時、但だ當に屢々帝を顧みるべきのみ」と。慎しみて言ふこと勿れ。此れ或は万一に冀ふべきのみ」と。乳母既に至る。朔も亦た側に侍す。因りて謂ひて曰はく、「汝は痴なるのみ。帝豈に復た汝が乳哺の時の恩を憶はんや」と。帝才雄にして心忍なりと雖も、亦た深く情恋有り。乃ち凄然として之を愍み、即ち勅して罪を免せり。

11

株宏『竹窓隨筆』

人知好利之害、而不知好名之為害尤甚。所以不知者、利之害粗而易見、名之害細而難知也。故稍知自好者、便能輕利。至於名、非大賢大智、不能免也。思立名、則故為詭異之行。思保名、則曲為遮掩之計。終身役役於名之不暇、而暇治心身乎。昔一老宿言、「拳世無有不好名者。」因發長嘆。坐中一人作而曰、「誠如尊諭。不好名者、惟公一人而已。」老宿欣然大悅解頤。不知己為所売矣。名関之難破如是哉。

○株宏しゆこう＝雲棲株宏うんせいしゆこう。明代四高僧の一人。禪と念仏を宗とし斜陽仏教の再編を図る。禪関策進を編纂。○見れるあいわ＝外に見えてくる。○稍しやう＝少し。○故ゆゑ＝わざと。○詭異きいの行い＝風変わりな行為。●曲まげて←事実を曲げての意。○遮掩しえんの計＝誤魔化しの計略。○役えき＝心身を勞するさま。○作たつ＝立ち上がる。○老宿らうしゆく＝高德の僧。○尊諭そんゆ＝他人を敬つてその教訓をいう語。○頤いを解とく＝口を開けて大笑いすること。○名関めいかん＝名譽と
いう関門。

人利を好むの害を知れども、名を好むの害を為すこと尤も甚だしきを知らず。知らざる所以は、利の害は粗にして見れ易きも、名の害は細にして知る難きなり。故に稍自ら好むことを知る者は、便ち能く利を軽んず。名に至りては、大賢大智に非ざれば、免るるを能はざるなり。名を立てんことを思はば、則ち故に詭異の行を為す。名を保たんことを思はば、則ち曲げて遮掩の計を為す。終身名に役役として之れ暇あらざれば、心身を治むるに暇有らんや。昔一老宿言ふ、「世を挙げて名を好まざる者有ること無し」と。因りて長嘆を發す。坐中の一人作ちて曰はく、「誠に尊諭のごとし。名を好まざる者は、惟だ公一人のみ」と。老宿欣然として大いに悦びて頤を解く。己の売る所と為るを知らざるなり。名関の破り難きこと是のいときかな。

12 『戦国策』

蘇代為燕將説齊王。先説齊淳于髡曰、人有売駿馬者。比三旦立於市、人莫之知。往見伯樂曰、臣有駿馬、欲売之。比三旦立於市、人無与言。願子還而視之、去顧之。臣請獻一朝之価。伯樂乃還而視之、去而顧之。一旦而馬価十倍。今臣欲

以駿馬見於王。無為臣先後者。足下有意為臣伯樂乎。臣請獻白壁一双・黄金千鎰、以為馬食。淳于髡曰、「敢不聞命乎」。入而見之。齋王大悦蘇子。

○蘇代＝中国戦国時代の縦横家（外交の策士）。○齊王＝中国における諸侯王、地方政権の君主の王号。○淳于髡＝戦国時代の齊の威王に仕えた学者。○比ぶ＝いたる。○与に＝一緒。○還る＝とりまく。○先後する＝側にいて扶け導くの意。○足下＝あなた。○馬食＝馬の餌代。

蘇代燕の為に將に齊王に説かんとす。先ず齊の淳于髡に説きて曰はく、人駿馬を売る者あり。三旦に比びて市に立つも、人之を知る莫し。往きて伯樂に見へて曰はく、「臣駿馬有り、之を売らんと欲す。三旦に比びて市に立つも、人与に言ふ無し。願はくは子還りて之を視、去りて之を顧みよ。臣請ふ一朝の価を献せん」と。伯樂乃ち還りて之を視、去りて之を顧みる。一旦にして馬価十倍す。今臣駿馬を以て王に見えんと欲す。臣の為に先後する者無し。足下臣の伯樂たるに意有るか。臣請ふ白壁一双・黄金千鎰を献じ、以て馬食と為さん」と。淳于髡曰はく、「敢へて命を聞かざらんや」と。入りて之を見えしむ。齋王大いに蘇子を悦ぶ。

13 『貞觀政要』

唐太宗謂侍臣曰、古人云、「鳥棲於林、猶恐其不高、復巢木末。魚藏於泉、猶恐其不深、復窟於其下。然為人所獲者、皆由貧餌故也。」今人臣受任居高位、食厚祿。当須履忠正、蹈公清。則無災害、長守富貴矣。語曰、「禍福無門、惟人所招。」然陷其身、皆為貧財利。与夫魚鳥何以異哉。卿等宜思此語、用為鑒戒。

○貞觀政要＝唐の太宗の言行録。唐の歴史家・吳兢撰。藏れる＝隠れる。○食む＝俸祿をもらう。○履む＝守り行う。○蹈む＝踏み行う。おこなう。○公清＝公明・潔白。○忠誠＝忠義を尽くすこと。○鑒戒＝戒め。

唐の太宗侍臣に請ひて曰はく、「古人云ふ、『鳥は林に棲むも、猶ほ其の高からざらんことを恐れて、復た木末に巢くふ。魚は泉に蔵るるも、猶ほ其の深かざらんことを恐れて、復た其の下に窟す。然れども人の獲る所と為るは、皆餌を貧るに由るが故なり』と。今人臣任を受けて高位に居り、厚禄を食む。当に須らく忠正を履み、公清を蹈むべし。則ち災害無く、長く富貴を守らん。語に曰はく、『禍福門無し、惟だ人の招く所』と。然らば其の身を陥るるは、皆財利を貪ほるが為なり。夫の魚鳥と何を以て異ならんや。卿等宜しく此の語を思ひ、用て鑒戒と為すべし」と。

14

『唐宋八家文』(韓愈「師説」)

古之学者必有師。師者所以传道受業解惑也。人非生而知之者。孰能无惑。惑而不从师、其为惑也、终不解矣。生乎吾前、其闻道也、固先乎吾、吾从而师之。生乎吾后、其闻道也、亦先乎吾、吾从而师之。吾师道也。夫庸知其年之先后生于吾乎。是故无贵无贱、无长无少、道之所存、师之所存也。嗟乎、师道之不传也久矣。欲人之无惑也难矣。

○唐宋八家文＝唐の韓愈・柳宗元、北宋の歐陽脩・蘇洵・蘇軾・蘇轍・曾鞏・王安石の八家の散文を選び集めた書。○業＝学業。終に＝しまいに。○固より＝素より。○庸ぞ＝どうして・・・か(反語)。

古の学者は必ず師有り。師は道を伝へ業を受け惑ひを解く所以なり。人は生れながらにして之を知る者に非ず。孰れか能く惑ひ無からんや。惑ひて師に従はずんば、其の惑ひたるや、終に解せず。吾が前に生まれて、其の道を聞けや、固より吾より先なれば、吾従ひて之を師とす。吾が後に生るとも、其の道を聞けや。亦た吾より先ならば、吾れ従ひて之を師とす。吾が道を師とするなり。夫れ庸んぞ其の年の吾より先後して生れたるを知らんや。是の故に貴と無く賤と無く、長となく少となく、道の存する所は、師の存する所なり。嗟乎、師の道の伝はらざるや久し。人の惑ひ無からんと欲するや難いかな。

秦攻趙邯鄲。平原君求救於楚。扞門下文武備具者二十人、与之俱、得十九人。毛遂自薦。平原君曰、「士処世、若錐処囊中、其末立見。今先生処門下三年、未有聞。」遂曰、「使遂得処囊中、乃穎脫而出。非特末見而已。」平原君乃以備數。十九人目笑之。至楚定從、不決。毛遂按劍歷階、升曰、「從之利害、兩言而決耳。今、日出而言、日中不決、何也。」楚王怒叱曰、「胡不下。吾与而君言。汝何為者。」毛遂按劍而前曰、「王所以叱遂、以楚国之衆也。今十步之内不得恃楚国之衆也。王之命懸於遂手。合從為楚、非為趙也。」王曰、「唯唯、誠如先生之言。謹奉社稷以從。」

○邯鄲＝趙の都。○平原君＝戦国時代の趙の公子で政治家。○毛遂＝平原君の食客で戦国時代の著名な説客。○薦める＝推薦する。○末＝錐の先端。○見れる＝現れる。外に見えてくる。○穎脱＝袋に包んだ錐の穂先が自然と突き出る意。才能が群を抜いて優れていること。○特に＝それだけ。○從＝合從。○按劍＝劍の柄に手をかけること。○歴階＝階段の一段ごとに片足ずつかけて上ること。また、急いで上ること。○升る＝上がる。○兩言＝yesかnoか。○胡ぞ＝どうして(疑問・反語)。○前む＝進みでる。○恃む＝たよる。

秦趙の邯鄲を攻む。平原君救いを楚に求む。門下の文武備具する者二十人を扞び、之と俱にせんとし、十九人を得たり。毛遂自ら薦む。平原君曰はく、「士の世に処るは、錐の囊中に処るがごとく、其の末立ちどころに見はる。今先生門下に処ること三年、未だ聞ゆること有らず」と。遂曰はく、「遂をして囊中に処るを得さしめば、乃ち穎脱して出でん。特に未見はるるのみに非ず」と。平原君乃ち以て数に備ふ。十九人之を目笑す。楚に至り從を定めんとするも、決せず。毛遂劍を按じて歴階し、升りて曰はく、「從の利害は、兩言にして決せんのみ。今、日出でて言ひ、日中にして決せざるは、何ぞや」と。楚王怒り叱して曰はく、「胡ぞ下らざる。吾而の君と言ふ。汝何為る者ぞ」と。毛遂劍を按じて前みて曰はく、「王の遂を叱する所以は、楚国の衆を以てなり。今十歩の内楚国の衆を恃むを得ざるなり。王の命は遂の手に懸れり。合從は楚の為にして、趙の為に非ざるなり」と。王曰はく、「唯唯、誠如先生の言の如し。謹みて社稷を奉じて以て從はん」と。

16 王維『送別』二首

A 下馬飲君酒 問君何所之

君言不得意 歸臥南山陲

但去莫復問 白雲無尽時

B 送君南浦淚如糸 君向東州使我悲

為報故人顛悴尽 如今不似洛陽時

○王維＝唐の詩人・画家。自然詩・山水画に長じ、南宗画の祖と仰がれる。開元七年（719）、進士に及第。安祿山の乱で捕らえられたが事なきを得、乱後は肅宗に用いられ尚書右丞（書記官長）まで進む。○歸臥＝官職を退いて故郷に帰り静かに生活すること。○陲＝周辺。○顛悴＝心配や疲労・病氣のためにやせ衰えること。○如今＝只今。

A 馬を下りて君に酒を飲ましむ 君に問ふ何の之く所ぞ

君は言ふ意を得ず 南山の陲に歸臥すと

但だ去れ復た問ふ莫れ 白雲尽くる時無し

B 君を南浦に送りて涙糸のごとし 君は東州に向ひ我をして悲しましむ

為に報ぜよ故人顛悴し尽くして 如今は似ず洛陽の時にと

17 『史記』田単列伝

燕之初入斉、聞画邑人王蠋賢、令軍中曰、「環画邑三十里無入。」以王蠋之故。已而使人謂蠋曰、「斉人多高子之義。吾以子為將、封子万家。」蠋固謝。燕人曰「子不聽、吾引三軍而屠画邑。」王蠋曰、「忠臣不事二君、貞女不更二夫。斉王不聽吾諫、故退而耕於野。国既破亡、吾不能存。今又却之以兵為君將、是助桀為暴也。与其生而無義、固不如烹。」遂経其頸於樹枝、自奮絶脰而死。

○田単＝戦国時代の斉の武将。燕によって滅亡寸前に追い詰められた斉を知略によって救う。○画邑＝都市の名。○王蠋＝斉の潛王に仕えていたが、王蠋の諫めを聞かないので野に下る。○令＝命令。○謝す＝断る。○還る＝ぐるりと取り巻く。○事える＝目上の人に仕える。○更める＝新しくかえる。○却す＝おどす。○経＝かける。経死＝首をくぐる。○脰＝うなじ、首筋。

燕の初めて齊に入るや、画邑の人王蠋の賢なるを聞き、軍中に令して曰はく「画邑を環ること三十里には入る無かれ」と。王蠋の故を以てなり。已にして人をして蠋に諱はしめて曰はく、「齊人多く子の義を高くす。吾子を以て将と為し、子を万家に封せん」と。蠋固く謝す。燕人曰はく「子聴かずんば、吾二軍を引きて画邑を屠らん」と。王蠋曰はく、「忠臣は二君に事へず、貞女は二夫を更めず。齊王吾が諫めを聴かず、故に退きて野に耕す。国既に破亡すれば、吾存する能ず。今又之を却すに兵を以てして君が将と為るは、是れ桀を助けて暴と為すなり。其の生きて義無からんよりは、固より烹らるるに如かず」と。遂に其の頸を樹枝に経け、自ら奮ひ脰を絶ちて死す。

18 『説苑』

趙襄子謂仲尼曰、「先生委質以見人主七十君矣。而無所通。不識世無明君乎。意先生之道、固不通乎。」仲尼不對。異日襄子見子路、曰「嘗問先生以道、先生不對。知而不對則隱也。隱則安得為仁。若信不知、安得為聖。」子路曰、「建天下之鳴鐘、撞之以挺、豈能發其声乎哉。君問仲尼、無及猶以挺撞乎。」

○説苑Ⅱ前漢・劉向の撰編による故事・説話集。○劉向Ⅱ前漢の学者・政治家。多数の著作で知られる。
○趙襄子Ⅱ春秋戦国時代の晋の政治家。○仲尼Ⅱ孔子。○委質Ⅱ尊上に初見のときに献する礼物。○意Ⅱ考える。○固Ⅱ本当に。○襄子Ⅱ春秋時代末期の晋の趙襄子。○信Ⅱ本当に。○挺Ⅱ鐘突棒のようにまっすぐ伸びている草の茎のこと。○猶Ⅱなほのこと。○再読文字。

趙襄子仲尼に謂ひて曰はく、「先生質を委して以て人主に見ふこと七十君。而も通ずる所無し。識らず世に明君無きか。意ふに先生の道、固に通ぜざるか。」仲尼対へず。異日襄子子路に見へて、曰はく「嘗て先生に問ふに道を以てするに、先生対へず。知りて対へざるは則ち隠すなり。隠せば則ち安んぞ仁と為すを得ん。若し信に知らずんば、安んぞ聖と為すを得ん」と。子路曰はく、「天下の鳴鐘を建てて、之を撞くに挺を以てせば、豈に能く其の声を発せんや。君仲尼に問ふは、及ち猶ほ挺を以て撞くがごときこと無からんや」と。

19 『世説新語』賢媛篇

許允婦是阮共女、奇醜。交礼音、允無復入。家人深憂。会允有客至。婦令婢視之。還答曰、「是桓郎。」桓郎者桓範也。婦曰、「無憂、桓郎必勸入。」桓郎果語允曰、「阮家既嫁醜女与卿、当有意。卿宜察之。」允便回入内、既見婦即欲出。婦料其出無復入、便捉裾停之。允因謂曰、「婦有四德、卿有其幾。」婦曰、「新婦所乏惟容爾。然士有百行、君有幾。」允曰、「皆備。」婦曰、「夫百行以德為首。君好色不好德。何謂皆備。」允有慚色、遂相敬重。

○許允＝許允士宗。魏晉時代の晋の高官。○阮共、桓範＝共に魏の高官。○交礼音＝婚礼を終えた。○会＝偶然に。○婢＝はしため。下女。○桓郎＝桓さま。○語げる＝告げる。○便ち＝するとすぐに。○回る＝戻る。○料る＝推量する。○幾＝どれほど。○婦人の四德＝言(辞令)・德(貞順)・功(容)・婉婉。○百行＝多くの正しい行為。○慚色＝恥じる顔色。

許允の婦は是れ阮共の女にして、奇醜なり。礼音を交ふるも、允復た入ること無し。家人深く憂ふ。会允に客有りて至る。婦婢をして之を視しむ。還りて答へて曰はく、「是桓郎なり」と。桓郎とは桓範なり。婦曰いはく、「憂ふること無かれ、桓郎必ず入ることを勧めん」と。桓郎果して允に語けて曰はく、「阮家既に醜女を嫁がしめて卿に与へしは、当に意あるべし。卿宜しく之を察すべし」と。允便ち回りて内に入り、既に婦を見て即ち出でんと欲す。婦其の出づれば復た入ること無からんと料り、便ち裾を捉りて之を停む。允因りて謂ひて曰はく、「婦に四徳有り、卿其の幾有りや」と。婦曰はく、「新婦の乏しき所は惟だ容のみ。然して士に百行あり、君幾有りや」と。允曰はく、「皆備ふ」と。婦曰はく、「夫れ百行は徳を以て首と為す。君は色を好みて徳を好まず。何ぞ皆備ふと謂はん」と。允慚色有り、遂に相ひ敬重せり。

20 『孟子』梁惠王下

齊宣王問曰、「文王之囿、方七十里。有諸。」孟子対曰、「於伝有之。曰、若是其大乎。曰、民猶以為小也。曰、寡人之囿、方四十里、民猶以為大、何也。曰、文王之囿、方七十里、芻蕘者往焉、雉菟者往焉、与民同之。民以為小、不亦宜

乎。臣始至於境、問国之大禁、然後敢入。臣聞、郊関之内、有囿方四十里。殺其麋鹿者如殺人之罪。則是方四十里、為阱於國中。民以為大、不亦宜乎。

○梁惠王Ⅱ戦国時代の魏の第二代君主。○宣王Ⅱ戦国時代・斉の第五代君主。○文王Ⅱ殷代末期・周の君主。
○囿Ⅱ狩場。○芻蕘者Ⅱ草刈りと木こり。身分の低い人。○雉兔者Ⅱ雉や兔を狩る者。○大禁Ⅱ重要な禁令。
○郊関Ⅱ城外の関所。○麋鹿Ⅱ大鹿と鹿。○阱Ⅱ落とし穴。○為るⅡこしらえる。○宜Ⅱなるほど。いかにも。

齊の宣王問ひて曰はく、「文王の囿は、方七十里と。これ有りや」と。孟子対へて曰はく、「伝に於て之有り」と。曰はく、「是の若く其れ大なるか」と。曰はく、「民猶ほ以て小と為すなり」と。曰はく、「寡人の囿は、方四十里なるも、民猶ほ以て大となすは、何ぞや」と。曰はく、「文王の囿は、方七十里、芻蕘の者も往き、雉兔の者も往き、民と之を同じうす。民以て小と為すも、亦宜ならずや。臣始めて境に至るや、国の大禁を問ひて、然る後敢て入る。臣聞く、郊関の内に、囿の方四十里有り。其の麋鹿を殺す者は人を殺すの罪のごとし。則ち是れ方四十里、阱を國中に為るなり。民以て大と為すも、亦宜ならずや」と。

21

『史記』張釈之列伝

文帝遊上林苑、問所養禽獸。尉尽不能对。下吏自傍对上所問。欲以觀其能、口对亡窮。上曰、「吏当如此。」以吏欲代尉。張釈之前曰、「陛下以為絳侯何如人也。」上曰、「長者。」復問、「東陽侯何如人也。」上復曰、「長者。」釈之曰、「夫称両侯為長者。然兩人言事猶不能出口。且秦以任刀筆之吏、吏争以苛察相高。其敝徒文具耳。無惻隱之実。故至於二世、天下土崩。今陛下以口弁而重用之、臣恐天下随風靡、争口弁亡其実。举措不可不察也。」

○張釈之Ⅱ前漢の人。文帝に仕え廷尉となる。○文帝Ⅱ前漢第五代皇帝。○上林苑Ⅱ天子の狩場。○尉Ⅱ狩場の管理人。○尽くⅡみな。○観すⅡみせる。○亡しⅡ比類ない。○前むⅡ進む。○何如なるⅡどのよう
な。○絳侯Ⅱ周勃。秦末から前漢初期の武将・政治家で建国の功臣。○以為つⅡ思つ。○東陽侯Ⅱ張相如。
○長者Ⅱ徳の高い人。○刀筆之吏Ⅱ刀筆を使って文書の仕事をする小官吏。○苛察Ⅱ細かい点にまで立ち入
って厳しく詮索すること。●相高しⅡ←価値があるという意。○敝Ⅱ弊害。○惻隱Ⅱ思いやる心。○土崩Ⅱ土
が崩れるように物事が次第に崩れていくこと。○靡くⅡ従う。○举措Ⅱ立ち居振る舞い。

文帝上林苑に遊び、禽獸を養う所を問ふ。尉廌く対ふる能はず。下吏傍より上の問ふ所に対ふ。以て其の能を觀さんと欲して、口対して窮まること亡し。上曰はく、「吏当に此のごとくなるべし」と。吏を以て尉に代へんと欲す。張釈之前みて曰はく、「陛下絳侯は何如なる人と以為へるや」と。上曰はく、「長者なり」と。復た問ふ、「東陽侯は何如なる人や」と。上復た曰はく、「長者なり」と。釈之曰はく、「夫れ両侯を称して長者と為す。然れども両人事を言ひては猶ほ口に出すこと能はざるがごとし。且つ秦は刀筆の吏を任んずるを以て、吏争ひて苛察するを以て相高しとす。其の敵は徒だ文具はるのみ。慳隱の実無し。故に二世に至りて、天下土崩す。今陛下口弁を以て之を重用すれば、臣天下の風に隨ひて靡き、口弁を争ひて其の実を亡はんことを恐る。拳措は察せざるべからずなり」と。

22 『春秋左氏伝』(泓水の戦い)

楚人伐宋以救鄭。宋公將戰。大司馬固諫曰、「天之棄商久矣。君將興之。弗可赦也已。」弗聽。及楚人戰于泓。宋人既成列、楚人未既濟。司馬曰、「彼衆我寡。及其未既濟也、請擊之。」公曰、「不可。」既濟而未成列。又以告、公曰、「未可。」既陳而後擊之。宋師敗績、公傷股、門官殲焉。国人皆咎公。公曰、「君子不重傷、不禽二毛。古之為軍也、不以阻隘也。寡人雖亡國之余、不鼓不成列。」子魚曰、「君未知戰。勅敵之人、隘而不列、天贊我也。阻而鼓之、不亦可乎。猶有懼焉。且今之勅者、皆吾敵也。雖及胡者、獲則取之、何有於二毛。明恥教戰、求殺敵也。傷未及死、如何勿重。若愛重傷、則如勿傷。愛其二毛、則如服焉。」

○宋公ウヱイイウキ 襄公。春秋時代の宋の君主。○大司馬・司馬ウヱイイウキ 司令長官の子魚。子魚は襄公の異母兄の公子(目夷)。
○商ウヱイイウキ 殷王朝の子孫の国である宋のこと。●及ト A乃B (AがBと一緒に)。○泓ウヱイイウキ 川の名。○濟ウヱイイウキ 渡る。
○陳ウヱイイウキ 並ぶ。○宋師ウヱイイウキ 宋の軍隊。○敗績ウヱイイウキ 大敗。○門官ウヱイイウキ 近衛兵。○殲ウヱイイウキ 全滅させる。●不重傷ウヱイイウキ 傷ついた相手に追い打ちをかける意。○禽ウヱイイウキ 捕虜。○二毛ウヱイイウキ 白髪交じりの老人。○阻隘ウヱイイウキ 隘しく狭い場所。○鼓ウヱイイウキ 打つ。○勅敵ウヱイイウキ 強敵。○胡者ウヱイイウキ 九十歳の老人。●恥ウヱイイウキ 軍律に違反する恥すべき行為。○愛むウヱイイウキ 手放しがた
くくおつむ。

楚人宋を伐ちて以て鄭を救ふ。宋公將に戦はんとす。大司馬固く諫めて曰はく、「天の商を棄つるや久し。君將に之を興さんとす。赦さるべからざるのみ」と。聴かず。楚人と泓に戦ふ。宋人列を成し既へ、楚人未だ濟り既へず。司馬曰はく、「彼衆く我寡し。其の未だ濟り

既へざるに及びて、請ふ之を撃たん」と。公曰はく、「不可なり」と。洺り既へて未だ列を成さず。以て又告ぐ、公曰はく、「未だ可ならず」と。陳び既りて後之を撃つ。宋師敗績し、公股を傷つき、門官殲く。國人皆公を咎む。公曰はく、「君子傷を重ねず、一毛を禽にせず。古の軍を為すや、阻隘を以てせざるなり。寡人亡国の余と雖ども、列を成さざるに鼓たず」と。子魚曰はく、「君未だ戦を知らず。就敵の人、隘にして列ばざるは、天我を賛くるなり。阻にして之に鼓つ、亦可ならずや。猶ほ懼れ有り。且つ今の就き者は、皆吾が敵なり。胡奇に及ぶと雖も、獲れば則ち之を取らん、何か二毛に有らんや。恥を明らかにし戦を教ふるは、敵を殺すを求むるなり。傷つきて未だ死に及ばざれば、如何んぞ重ぬる勿からん。若し傷を重ぬるを愛しめば、則ち傷つくる勿きに如かんや。其の二毛を愛めば、則ち服するに如かんや」と。(※襄公は股の傷が元で翌年死亡。敵に対する無用の情け、分不相応な情けのことを「宋襄の仁」といふ。)

23 『金臺紀聞』

金華載元礼、国初名医。嘗被召至南京、見一医家。迎求溢戸、酬応不問。元礼意必深于術者、注目焉。按方発剂、皆無他異。退而怪之、日往觀焉。偶一人求薬者、既去。追而告之曰、臨煎時下錫一塊。磨之去。元礼始大異之、念無以錫入煎剂法、特叩之。答曰、是古方爾。元礼求得其書、乃錫字耳。元礼急為正之。嗚呼、不弁錫錫而医者。世胡可以弗謹哉。

○金臺紀聞＝明朝中期の政治家・書家の陸深編纂。朝廷の故事や論談など。○金華＝地名。○間＝ひま。○焉＝「于是」を一字に縮約して合字にしたものとされる。○按じる＝考えをめぐらす。●劑を發す←薬を出す。○磨＝指図する。○叩す＝質問する。○錫＝飴。○胡ぞ＝どうして・・・か(反語)。○謹しむ＝気を引き締める。

金華の載元礼は、国初の名医なり。嘗て召されて南京に至り、一医家を見る。迎求するも戸に溢れ、酬応すること問あらず。元礼必ず術に深き者ならんと意ひ、焉に注目す。方を按じ劑を發すること、皆他異無し。退きて之を怪しみ、日び往きて焉を觀る。偶たま一人の薬を求むる者あり、既に去る。追ひて之に告げて曰はく、「煎する時に臨みて錫一塊を下せ」と。之に磨して去る。元礼始め大いに之を異とするも、錫を以て煎に入るる劑法無

きを念ひ、特に之に叩す。答へて曰はく、是れ古の方なるのみ。元礼其の書を得んことを求むれば、乃ち饒の字なるのみ。元礼急ぎ為に之を正す。嗚呼、饒録を并せずして医者なり。世胡ぞ以て謹まざるべけんや。

24 賈誼『新書』

鄒穆公有令食鴈者、「必以糝、毋敢以粟。」於是倉無糝、而求易於民、二石粟而易一石糝。吏請曰、「以糝食鴈、為無費也。今求糝於民、二石粟而易一石糝。以糝食鴈、則費甚矣。請以粟食之。」公曰、「去、非汝所知也。夫百姓煦牛而耕、曝背而耘、苦勤而不敢怠者、豈為鳥獸也哉。粟米人之上食也。奈何其以養鳥也。且汝知小計、而不知大計。周諺曰、「囊漏貯中。」汝獨弗聞歟。夫君者民之父母也。取倉之粟、移之與民、此非吾粟乎。鳥苟食鄒之糝、不害鄒之粟而已。粟之在倉與其在民、於吾何擇。」

○賈誼＝前漢の政治家・思想家・文学者。○新書＝賈誼の表した散文。○穆公＝春秋時代の秦の第九代公。
○食ふ＝養つ。○糝＝米の殻ばかりで実のないもの。○粟＝穀物。●母れ←強い否定。○易える＝交換する。○費え＝費用。○煦＝あたため育てる。○耘＝草を刈る。○苦勤＝骨折り。●囊漏貯中←袋の中身が別の袋にこぼれる、つまり実質的に変わりのないことの例え。○歟＝与（疑問の終助詞）。

鄒の穆公鴈を食ふ者に令する有り、「必ず糝を以てせよ、敢へて粟を以てする毋れ」と。是に於て倉に糝無くして、易へんことを民に求め、「二石の粟にして一石の糝に易ふ。吏請ひて曰はく、「糝を以て鴈を食ふは、費無きが為なり。今糝を民に求むるに、二石の粟にして一石の糝に易ふ。糝を以て鴈を食ふは、則ち費甚しきなり。請ふ粟を以て之を食はん」と。公曰はく、「去れ、汝の知る所に非ざるなり。夫れ百姓牛を煦して耕やし、背を曝して耘り、苦勤して敢へて怠らずは、豈に鳥獸の為ならんや。粟米は人の上食なり。奈何んぞ其れ以て鳥を養はんや。且つ汝小計を知るも、大計を知らず。周の諺に曰はく、「囊漏るも中に貯ふ」と。汝獨り聞かざるか。夫れ君なる者は民の父母なり。倉の粟を取りにて、之を移して民に與ふるも、此れ吾が粟に非ざるか。鳥苟しくも鄒の糝を食うはば、鄒の粟に害あらざるのみ。粟の倉に在ると其の民に在ると、吾に於いて何か擇ばん。」

25

『六一詩話』

孟郊・賈島皆以詩窮至死。而平生尤自喜為窮苦之句。孟有移居詩云、「借車載家具、家具少於車。」乃是都無一物耳。又謝人惠炭云、「暖得曲身成直身。」人謂、非其身備嘗之、不能道此句也。賈云、「鬢邊雖有糸、不堪織寒衣。」就令織得、能得幾何。又其朝飢詩云、「坐聞西床琴、凍折兩三絃。」人謂、其不止忍饑而已、其寒亦何可忍也。

○六一詩話 詩の評論集。北宋の政治家・学者・文学者。唐宋八大家の一人とされる歐陽修の著。○孟郊 唐の詩人。詩は困窮・怨恨・憂愁を主題としたものが多い。○都て 〓みな。○一物 〓それらしい家具。○備に 〓細かで詳しいさま。○嘗める 〓体験する。○就令 〓もし。○止だ 〓わずかに。○饑える 〓飢える。

孟郊・賈島皆詩を以て窮して死に至る。而して平生尤も自ら喜んで窮苦の句を為る。孟に居を移すの詩有りて云ふ、「車を借りて家具を載するに、家具車よりも少し」と。乃ち是れ都て一物無きのみ。又た人の炭を恵むを謝するに云ふ、「暖め得て曲身は直身と成りぬ」と。人謂へらく、其の身備に之を嘗むるに非ずんば、此の句を道ふこと能はざるなり。賈云ふ、「鬢邊糸有りと雖も、寒衣を織るに堪へず」と。就令織り得とも、能く幾何なるを得ん。又た其の朝飢の詩に云ふ、「坐して聞く西床の琴、凍りて折る兩三絃」と。人謂へらく、其れ止だに饑を忍ぶのみならず、其の寒も亦た何ぞ忍ぶべけんや」と。

26

『韓非子』五蠹編

楚人有直躬。其父窃羊、而謁之吏。令尹曰、「殺之。」以為直于君、而曲于父。報而罪之。以是觀之、夫君之直臣、父之暴子也。

魯人從君戰、三戰三北。仲尼問其故。对曰、「吾有老父、身死莫之養也。」仲尼以為孝、舉而上之。以是觀之、夫父之孝子、君之背臣也。故令尹誅而楚姦不上聞、仲尼賞而魯民易降北。上下之利若是其異也。而人主兼拳匹夫之行、而求致社稷之福、必不幾矣。

○五蠹(蠹は木食虫)＝法治を害する五つの害虫。(1)道徳をふりかざし法を批判する学者、(2)詭弁を弄する遊説家、(3)法を犯す侠客、(4)賄賂を貪る近侍者、(5)農夫の利を貪る商工業者。韓非は君主がこの五蠹の民を除かなければ国が滅んでも不思議はないとした。○直躬＝人名。父親が羊を盗んだことを正直に訴え出した人物。○窃む＝こっそり盗みとる。○調＝告げる。○令尹＝宰相。○曲＝道理にもとること。○報いる＝裁決する。○三戰三北＝三戰三敗。○挙げて＝推挙して。○誅＝懲罰。○楚姦＝楚人の犯した罪。○上聞＝朝廷に書面で報告する。○兼ねて＝ひろく。併せて。○社稷之福＝国家の幸福。○幾う＝切望する。

楚人に直躬なるもの有り。其の父羊を窃み、而して之を吏に謁ぐ。令尹曰はく、「之を殺せ」と。以て君に直なれども、父に曲なりと為せばなり。報いて之を罪せり。是れを以て之を覩れば、夫れ君の直臣は、父の暴子なり。

魯人君に従ひて戦ひ、三戰三北するあり。仲尼其の故を問ふ。対へて曰はく、「吾に老父有り、身死せば之を養ふもの莫しなり」と。仲尼以て孝と為し、挙げて之を上せり。是れを以て之を覩れば、夫れ父の孝子は、君の背臣なり。故に令尹誅して楚姦上聞せられず、仲尼賞して魯の民降北し易し。上下の利は是のごとく其れ異なるなり。而して人主兼ねて匹夫の行ひを挙げて、而も社稷の福を致さんことを求るは、必ず幾ふべからず。

27

『春秋左氏伝』

鄭人游于郷校、以論執政。然明謂子産曰、「毀郷校如何。」子産曰、「何為。夫人朝夕退而游焉、以議執政之善否。其所善者、吾則行之、其所惡者、吾則改之。是吾師也。若之何毀之。我聞忠善以損怨、不聞作威以防怨。豈不遽止。然猶防川。大決所犯、傷人必多、吾不克救也。不如小決使道。不如吾聞而棄之也。」

○然明＝鄭の国の官僚。○郷校＝村の学校。○子産＝鄭の国の宰相。○若之何＝如何。○損する＝減らす、少なくするの意。○威＝人を従わせる力。権力。○遽に＝急いで。○傷なう＝傷つける。○克くす＝能力が十分にある。○道く＝導く。

鄭人郷校に遊び、以て執政を論ず。然明子産に謂ひて曰はく、「郷校を毀たば如何」と。子産曰はく、「何ぞ為さん。夫の人びと朝夕に退きて焉に遊び、以て執政の善否を議す。其

の善とする所の者は、吾則ち之を行ひ、其の悪とする所の者は、吾則ち之を改む。是れ吾が師なり。若之何ぞ之を毀さん。我忠善は以て怨みを損するを聞くも、威を作して以て怨を防ぐを聞かず。豈に遽に止めざらんや。然れども猶ほ川を防ぐがごとし。大決の犯す所は、人を傷ふこと必ず多く、吾克く救はざるなり。小決して道びかしまるに如かず。吾聞きて之を薬とするに如からざるなり」と。

28

劉希夷『代悲白頭翁』

洛陽城東桃李花 飛來飛去落誰家
洛陽女兒惜顏色 行逢落花長歎息
今年花落顏色改 明年花開復誰在
已見松柏摧為薪 更聞桑田變成海
古人無復洛城東 今人還對落花風
年年歲歲花相似 歲歲年年人不同
寄言全盛紅顏子 應憐半死白頭翁

○劉希夷 唐の詩人。容姿は優れ物事に拘らない性格であったが素行が悪かった。酒と音楽を好み琵琶の名手。六七五年進士となるが仕官せず各地を遊覧した。○顏色 美しい顔立ち、容色。○惜しむ 手離しがた
く思う。○環た 再び。

洛陽城東桃李の花 飛び來たり飛び去りて誰が家に落つ
洛陽の女兒顔色を惜しむ 行くゆく落花に逢つて長く歎息す
今年花落ちて顔色改まり 明年花開ひて復た誰か
已に見る松柏摧かれて薪と為るを 更に聞く桑田變じて海と成るを
古人復た洛城の東に無く 今人還對す落花の風
年年歲歲花相似たり 歲歲年年人同じからず
言を寄す全盛の紅顏子 應に憐れむべし半死の白頭翁

29

吉村秋陽『讀我書樓遺稿』

詩者非丈夫之業也。作之亦可、不作亦可、固不足競得失於此。雖然使人之情有所鬱憂不暢、則往往變為戾氣。故假諸永言而泄之、亦所以輔其發揚也乎。蓋遣情之具出於自然者、殆非可廢矣。然則世或好之而切切然累其志、與不好而詆罵斥絕嫉之如仇者、其為偏見一也。

○吉村秋陽 江戸時代後期の儒學者。○丈夫 一人前の男子。○業 なりわい。○得失 利と不利。○鬱憂 心が塞ぎ晴れ晴れとしないこと。○暢 びる びのびする。○戾氣 ねじけた心。○假りて 仮託して。○永言 長くのばしてうたう。詩歌。○泄らす 発散する。○発揚 奮い起こす。●遣情之具 (詩歌とは) 気を晴らす道具といった意。○切切然 心に強く迫るさま。○累う 憂う。

詩なる者は丈夫の業に非ざるなり。之を作るも亦た可、作らざるも亦た可、固より得失を此に競ふに足らず。然りと雖も人の情をして鬱憂して暢びざる所有らしめば、則ち往往にして變じて戾氣と為る。故に諸を永言に仮りて之を泄らすは、亦た其の発揚を輔くる所以なるか。蓋し情を遣るの具にして自然に出づる者は、殆んど廢すべきに非ず。然らば則ち世の或ひは之を好みて切切然として其の志を累はすと、好まずして詆罵斥絶して之を嫉むこと仇の如くなるとは、其の偏見たることなり。

30

崔東壁『釈明』

「人有明、有不明。生而然乎。」曰、「非也。用其明則明矣。不用其明則不明矣。」曰、「何以知其然也。」曰、「子不見夫目乎。瞽者千万人而不一二遇也。上古之時、有離朱者、暗室之中、能察五色、千万年而不一二遇也。其他有目者、皆相似也。或明、或不明、倍焉而已耳。又其甚者、莛焉什焉而已耳。烏有相千百者哉。夫心之明亦若是而已耳。」曰、「然則何以相遠。」曰、「孟子曰、『一羽之不舉、為不用力焉、與薪之不見、為不用明焉。』吾幼時至人家。歸而問其人之所衣、不知也。此無他、不視之故也。吾嘗自芟樹、不自決其当芟否也。明日行於途、見樹焉則視之、歸而數其所見之樹、幹之長短、枝之多少、歷歷猶在吾目中也。此無他、視之之故也。故視則明、不視則不明。自掩其目、則雖置泰山於其前、而不知也。夫心之明亦若是而已矣。」

○崔東壁さいとうへき＝中国清代の儒学者。多数の古典の批判的研究を行い、没後、門人によって《崔東壁先生遺書》として刊行された。○瞽者こしや＝目の見えない人。○離朱りしゆ＝中国の古伝説上の人物。黄帝時代の人で視力に優れ百歩離れた所からでも毛の先まで見ることができたと伝えられる。○察あきらか＝明らか。○焉の而已耳み＝而已耳、而已矣。○徒し＝五倍の数。○什じゅう＝十倍の数。○烏いんぞぞ＝どうして・・・だろうか。(推量を伴う反語)。○一羽いちう＝一枚の羽根。○與薪よよしん＝車一台分の薪。○莖かるる＝刈る。○歴れき歴れき＝明らかさま。

「人に明有り、不明有り。生れながらにして然るか」と。曰はく、「非なり。其の明を用ふれば則ち明。其の明を用ひざれば則ち不明」と。曰はく、「何を以て其の然るを知るか」と。曰はく、「子は夫の目を見ざるか。瞽者は千万人にして一にも遇はざるなり。上古の時、離朱しゆという者有りて、暗室あんしつの中にて、能く五色を察あきらかにす、千万年にして一にも遇はざるなり。其の他の目有る者は、皆相あひひ似るなり。或いは明にして、或いは不明なるも、倍なるのみ。又其の甚たしき者は、徒し仕のみ。烏いくんぞ相あひ千百なる者有らんや。夫れ心の明も亦た是くの若きのみ」と。曰はく、「然らば則ち何を以て相あひひ遠とほきか」と。曰はく、「孟子曰はく、『一羽を之れ挙げざるは、力を用ひざるが為なり、與薪を之れ見ざるは、明を用ひざるが為なり』と。吾幼わがこころき時に人家にんがに至る。歸りて其の人の衣る所を問ふに、知らざるなり。此れ他無し、視みざるの故なり。吾嘗わがたづねて自ら樹を莖かるに、自ら其の当あたに莖かるべきや否いなやを決せざるなり。明日途あしたのちに行きて、樹を見れば則ち之を視、歸して其の見る所の樹を数ふれば、幹の長短、枝の多少、歴れき歴れきとして猶ほ吾が目の中に在るがごときなり。此れ他無し、之を視るの故なり。故に視れば則ち明なり、視ざれば則ち不明なり。自ら其の目を掩へば、則ち泰山を其の前に置くと雖ども、而も知らざるなり。夫れ心の明も亦た是くの若きのみ」と。